

千葉の砂浜の思い出

筑波大学生物資源学類 糟谷 大河

長野県に生まれ、さらに埼玉県で少年時代を過ごしたわたしにとって、東西を海に囲まれた千葉県は印象深い場所のひとつである。生まれ故郷の長野県は、日本の屋根とも言える山国で、一方、今の実家がある埼玉県は、平坦な関東平野のほぼ中央に位置している。どちらにも共通しているのは海がなく内陸性の気候であるということで、島国日本でありながら、わたしは海を遠い存在として育った。そんなわけで、心のどこかに海に対する特別な感情があるのかもしれない。きのこの研究をするようになって、山ではなく、なぜか海辺の砂浜にきのこ採りに行くようになっていた。中でも、千葉の海辺は、わたしが本格的に砂浜のきのこに取り組みきっかけとなった場所である。

その日、わたしは千葉の海辺に行った

はじめて千葉の海辺に出かけたのは、高校3年生の冬である。卒業を間近に控えた2月、わたしはすでにはやばやと大学への進学が決まっていたので、同級生が国公立大学の二次試験のために必死になっているのを尻目に、学校での勉強はすっかり辞めていた。勉強をしないで、ふらふらと気の赴くまま、特に目的もなく、自転車や電車でどこかに出かけることが多かった。内田百閒先生によれば「用事がなければどこへも行ってはいけな」と云ふわけではない」そうなので、どこかに行くためには、目的がなくてもよいのである。その日、わたしは千葉駅まで行き、そこから外房線に乗り、大原駅のひとつ手前にある三門駅

というところで降りた。

地図で見ると、千葉県の東側は太平洋の外洋に面し、銚子市の犬吠埼からいすみ市の太東崎にかけて、長い砂浜がひろがっている。九十九里浜である。一方、太東崎から南は、白浜の野島崎に至るまで、主に切り立った岩礁海岸になっている。三門駅は、その九十九里浜の南の端、太東崎の近くに位置していた。長い長い九十九里浜の終わりが、どうなっているのか見たかった。三門駅は無人駅だった。駅に降り立ち、海に向かって15分ほど歩き、夷隅川の河口の南に広がる和泉浦という浜に出た。

そこから夷隅川の河口を経て、太東崎まで歩いた。岬へは、細く、勾配のやや急な曲がりくねった道を登っていく。岬の周囲は照葉樹林に覆われ、紀伊半島あたりの景観を彷彿とさせる。登り切って、太東崎の灯台のそばから眼下に眺める太平洋と、太東漁港のあたりを起点として北東方向に長く伸びる九十九里浜が、どこまでも続いているように広々と見えた。反対方向を向くと、西日が逆光となってきらきら反射する夷隅川の流れと、その奥に続く房総丘陵の冬の山並みがひととき美しくかった。千葉も捨てたもんじゃない、と思った。

砂浜には変わったきのこが生える!?

その後、わたしは大学に入ってからすぐに運転免許を取り、貯金をはたいて黒いポンコツ車を購入した。その車で初めて遠出をしたのは千葉だった。当時、海岸クロマツ林の外側の、

波打ち際に近い砂浜には変わったきのこが生えるらしい、といううわさを聞きつけ、本当にそんなところにきのこが生えるんかね、と半信半疑だったわたしは、晩秋のある日、九十九里浜に出かけることにした。大学のある茨城県のつくばからは、九十九里浜へは車で2時間ほどで行ける。

まず、一宮の浜に行き、そこから長生、白子、さらに成東の砂浜を一日かけて歩いた。話によれば、これらの砂浜の、汀線に近い海浜植物群落の中には、コナガエノアカカゴタケ(図1)やケシボウズタケの仲間が生えるらしかった。しかし、探し方が悪かったのか、それともたまたま生えていなかったのか、そのときは、きのこはひとつも見つからなかった。

未知の世界との境界で見つけたきのこ

でも、荒漠とした広い砂浜と、遙かに続く太平洋のただっ広い空間的広がりが新鮮な風景だった。ふるさとの原風景というのは、人によっていろいろなものがあるが、わたしにとっての原風景は盆地である。飯縄山や戸隠山など、四方を山に囲まれた善光寺平で生まれたためか、わたしにとって、周りを山に囲まれるというのは、安心感をもたらす要素らしい。一方、九十九里浜は、眼前には太平洋、周囲は砂浜、振り返ってみればクロマツ林。これでおしまいである(図2)。周りを遮るものがない。空間がどこまでも広がっていく。これは新鮮であり、不安をもたらす要素だった。確かに、遮るものがなく広がるように見えても、どこかで終点がある、ということは頭ではわかっているのだけれど、一見広い関東平野だって、せいぜい筑波山や赤城山や秩父山地にぶつかっておしまいである。

でも、九十九里浜の東には、アメリカ大陸まで遮るものがないのだ。これはえらいことである。言ってみれば、九十九里浜は未知の世界との境界ではないか。盆地生まれに生来



図1 コナガエノアカカゴタケ(*Lysurus periphragmoides*) . 茨城県東海村の村松海岸で(2005年11月3日)



図2 九十九里浜の代表的な景観 . 左側にクロマツ林、中央に砂浜、そして右側には太平洋が広がる . 千葉県山武市の蓮沼海岸で(2006年3月30日)

の貧乏性が加わって、広い空間に一人でいると、無性に不安になってくる。広さに飲み込まれてしまいそうに思うのかもしれない。そんなわけで、初めて九十九里浜を歩いたとき、強く感じたのは不安である。でも、不安と同時に、もっと砂浜を歩きたいとも思った。不安よりも、新鮮さが勝ったのだ。そして、そんな不安な砂浜に、好きこのんで生えるというきのこを見たいと思った。

それから砂浜通いが始まった。茨城県の鹿島灘から九十九里浜にかけては、何回も通った。真冬の成東の砂浜の、波打ち際にほど近いコウボウムギの群落内で、スナジクズタケ



図3 ウネミケシボウズタケ(*Tulostoma striatum*) . 千葉県山武市の蓮沼海岸で(2006年3月30日)



図4 スナヤマチャワンタケ(*Peziza ammophila*) . 千葉県山武市の蓮沼海岸で(2006年5月26日)

らしいきのこを初めて見つけた時は感激だった。不思議なもので、一度きのこが見つかるようになると慣れてくるのが、それから次々と見つけることができた。

蓮沼や野栄の浜では、ウネミケシボウズタケ(図3)やスナヤマチャワンタケ(図4)も念願かなって見つけることができた。不安な千葉の砂浜は、きのこが見つかるようになってから、いつしか通い慣れたフィールドに変わっていた。それと共に、砂浜できのこを見つけたたびに、こいつらはよりによってなぜ砂浜に生えるのか、という疑問がどんどん膨らんでいった。砂浜に通い続けるうち、わたしは大学3年になっていた。

砂浜のきのこの生態を調べてやろう

大学では植物病理の研究室に入ったのだが、3年の終わりになって卒業研究のテーマを決めるときに、誰からも研究テーマを与えられなかったわたしは、砂浜で研究することに勝手に決めた。千葉の海辺できのこたちに出会ってから、北海道から四国にかけての砂浜を行脚し、津々浦々できのこを探した。おもしろいきのこはたくさん見つかった。でも、なぜ砂浜に生えるのか、という疑問は解決できなかった。だから、この機会にこいつらの生態を調べてやろうと思ったのである。

4年の卒業研究では、北海道、千葉、静岡の砂浜に定点調査区を設置し、毎月、調査区内のきのこの子実体発生状況を調べた。千葉では、通い慣れた蓮沼海浜公園の浜に調査区を設置した。

「きみのあおいクルマでうみへいこー
おいてきたなにかをみにゆこー」

千葉や静岡の砂浜に毎月通うのは楽しかった。黒いポンコツ車に乗って、お気に入りのスピッツの「青い車」を口ずさみながら、海に向かってすっ飛ばすのは爽快だった。砂浜できのこ採りをするのも楽しかった。

真夏の炎天下の中、蓮沼ではカヤネダケ(図5)を採集するために汗だくになって作業



図5 カヤネダケ(*Marasmiellus* sp.) . 分類学的に再検討が必要な菌であり、学名は今後変更される可能性がある。兵庫県神戸市須磨区の海岸で(2006年6月28日)

したのも楽しかった。おかげで標本はいっぱい集まった。データもそれなりに集まった。あっという間に、卒業論文を書く時期が近づいていた。

卒研で分かったこと分からないこと

卒業研究の結果、いろいろなことがわかった。子実体発生量は降水量と密接に相関していること、北海道の砂浜では、降水量がたとえ多くても、平均気温が15を下回ると子実体発生量は著しく低下すること、海浜植物の帯状分布と相関するように、きのこの子実体発生にも帯状分布の様式が見られること、砂浜に生えるきのこの多くが、未記載種または日本新産種であることなど、それなりに興味深い知見を得ることができた。でも、論文をまとめながら思うのだけれど、結局、今ま

で砂浜のきのこのこと付き合ってきた、その生き様のほんのわずかのことしか、理解できていないような気がする。成東の砂浜で初めてきのこに出会ってから胸に抱き続けてきた、なぜ、こいつらはよりによって砂浜に生えるのか、という疑問は、まだ、解決できていないのだ。

砂浜に、わたしとともに通い続けた黒い車は、いろいろあって現役を引退することになった。今度は、文字通り「青い車」で千葉の砂浜に行こうと思っている。千葉の砂浜は、わたしにいろいろなことを教えてくれた。これからも、千葉の砂浜に、また、そこに生えるきのこたちに、いろいろなことを教わりに行くだろう。今では、そこはわたしにとって第二の原風景である。

海外旅行の楽しみ きのごグッズ編(1)

吉田 悦子

海外旅行の楽しみはたくさんありますが、きのごグッズを見つけることもその一つでしょう。2006年3月23日から約3週間、オーストラリアのタスマニア島に行ってきました。タスマニアの州都ホバートという町では毎週土曜日にサラマンカン・マーケットという市が立つので私も出かけてみました。カラフルな花や新鮮な野菜、熱々のパイ、アクセサリー、木工品などの露店が並び、賑わっていました。ガラス工芸品を売る露店でガラスのきのこを多数発見(写真)。

その中の2個を購入したのに、ホテルで開けてみると何故か1個だけに。嘘!。別の露店で美しいガラス製のきのこを見つけて3個買いました。木工のお店で1個発見。クレードル・マウンテン国立公園ではCradle Mountain Lodgeという快適なロッジに泊まり、売店でバンクシアの実で作られたきのこを買いました。最後にポート・フーオンからホバートに帰る途中に立ち寄ったクラフト店でも木製のきのこを購入。全部で6種(本当は7種のはずが...)という大収穫でした。

